

〔秋の美・冬の美展によせて〕

## 「雪中帰牧図」の伝来をめぐって

「雪中帰牧図」(図1・国宝・大和文華館蔵、以下本作と記す)は、南宋時代の画院画家・李迪の落款を有し、南宋絵画の名品の一つとして知られています。細やかな筆致の墨を主体としつつ、野夫が竿から提げたる雉や兎、枯れ草、雪などには色を効果的に差し、寒く静かな冬の夕暮れの情景を見事に表現しています。右幅の牛や柳に見られる墨の微妙な濃淡を用いた巧みな立体表現に比べると、左幅は木や岸の影を表す濃墨のコントラストが強いなどの差異がありますが、室町時代後期にはすでに日本で対幅として鑑賞されていたことが指摘されています。

日本にもたらされた宋・元時代の絵画・工芸は唐物と呼ばれ、大変珍重されました。唐物の優品は一所に長らく所蔵されることもありましたが、時代により様々な権力者や有力茶人の手を移り渡ることも多く、本作も少なくとも、室町幕府第九代将軍足利義尚、後藤家、井伊家、益田鈍翁の所蔵を経てきたことが、付属資料や文献資料から明らかにされています。ここでは、井伊家と益田鈍翁の所蔵に関して注目してみたいと思います。

本作が江戸時代のある時期に彦根藩主井伊家に所蔵されていたことは、付属資料と模写作品から推定されています。本作には添状と書簡が付属しており、添状は幕府の御用絵師を勤めた狩野探幽から大名茶人片桐石州へ宛てたもので、「二幅対牛之絵李迪真筆一段見事と奉存候」と

本作を賞賛しています。書簡(図2)は井伊掃部頭より黒屋数馬に宛てられたもので、冒頭に「二幅一對 李迪牛之絵」と共に風炉、水指などの茶道具を五点挙げ、その後「右之分此中上市〔カ〕より参入不申候間返置候、李迪二幅一對狩野法眼老に見せ候得ば正筆疑無之候、代三百貫又は望に存候はば四百貫にても不苦候由申来候間左様に可有御心得候」と記されています。この「狩野法眼」も狩野探幽を指すのであれば、絵画鑑定を多く行っていた探幽が本作を李迪の真筆であり、三〜四百貫に値するものと認めたことや、井伊掃部頭が探幽(1602〜74)と同時代頃の井伊家当主であろうことが分かります。時代と書簡の筆跡から彦根藩第二代藩主井伊直孝(1590〜1659)である可能性が指摘されています。

探幽による本作の模写は現存が確認できませんが、大和文華館には伝狩野安信と狩野守道の模写、東京国立博物館には狩野栄信の模写が残されており、狩野派において模写すべき作品として高く評価されていたことが窺えます。特に栄信の模写には「井伊掃部頭殿より来」という書き込みと寛政12年(1800)7月20日の年記があり、探幽から栄信の時代まで、つまり17世紀後半から19世紀初めまで本作が井伊家の所蔵であったのではないかと想定されています。

ここで注目されるのが、近時紹介された千秋文庫所蔵の本作の模写作

品(図3)です。模写をした絵師の名は記されないものの、秋田藩佐竹家に仕えた狩野派によるものと思われ、大変丁寧に写し取られています。千秋文庫所蔵の模写には「寛政三庚申十二月松平下総守殿より借写」と記されており、寛政3年当時の松平下総守というと、桑名藩主松平忠功(奥平松平家六代目)にあたります。模写作品の書き込みから、寛政12年には井伊家に、寛政3年には奥平松平家に本作があったように受け取れますが、模写作品は本物を模写したものか、それとも模写をさらに模写した重模写なのかを見極めるのが難しく、寛政3年に奥平松平家から借りた作品自体が模写であった可能性も充分考えられます。ただ、奥平松平家と本作とのつながりは千秋文庫所蔵の模写だけでなく、本作に付属する書簡からも窺えます。書簡は井伊掃部頭から黒屋数馬に送られたものでしたが、松平忠功の四代前、松平忠弘(奥平松平家二代目)の頃の家老に黒屋数馬という人物がおり、おそらく送り先はこの奥平松平家の家老であると考えられます。

茶の湯で重宝される唐物は大名家や将軍家などの間で、贈り物や貸借の対象ともなっていました。例えば李迪作品に注目すれば、具体的な該当作品は分からないものの、宝永4年(1707)9月に稲葉丹後守正往より致仕を謝して将軍綱吉へ、享保元年(1716)6月に将軍家継の形見分けとして久世大和守重之へ李迪の作品が贈られていることが『徳川実紀』に記されています。本作に関しても、書簡に「返置」という言葉や値

段が記されることから、様々な遣り取りがあり、そこには奥平松平家も関わったことが想像されます。

明治維新後になると、大名家などを中心に所蔵されていた唐物の多くが売り立てられ、代わって実業家茶人たちがその収集を始めます。本作は近代実業家茶人を代表する益田鈍翁に所蔵されていたことが知られていますが、特に大正7年の大師会に関する高橋箴庵の茶会記には、鈍翁の所蔵となった経緯が記されています。それによると、本作は明治25、6年頃に朝吹紫庵が鈍翁のために麴町の質商倉又右衛門より買い取ったものと言います。実業家茶人の間でも作品の紹介や譲渡、売買が盛んに行われており、本作も鈍翁だけでなく、同じく実業家茶人として著名な紫庵と共に見出されていたことが窺えます。

本作の伝来に関して目を向けてきましたが、現在のように美術館で作品が一般公開されるのは異なるものの、名品は蔵の奥深くに眠っているだけではなく、権力者や数寄者たちの交友関係を中心としてその鑑賞が共有され、作品の価値を高めてきていることが伝わってきます。

その後、本作は大和文華館の所蔵となりますが、初代館長矢代幸雄が本作を初めて目にしたのは、益田鈍翁の茶室に於いてでした。後に矢代は、若き日のその感動を「何といふ静かな、淋しいほど静かな、境涯であらう。茶室の沈静した光も丁度よかったが、その光の中に、この精緻な宋絹の淡い温い灰色が蒼茫として、滲じむが如く、匂ふが如く、霞んで見えるのが堪らないものであった。」と記しています。(宮崎もも)

図1

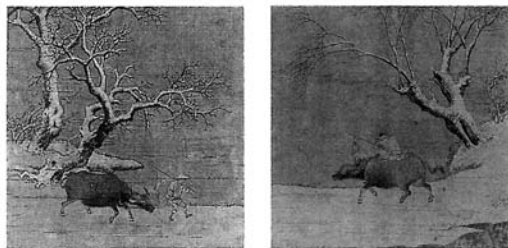


図2

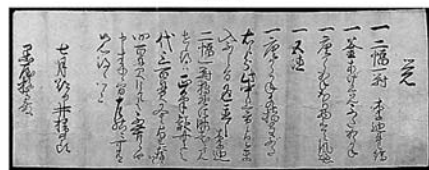


図3

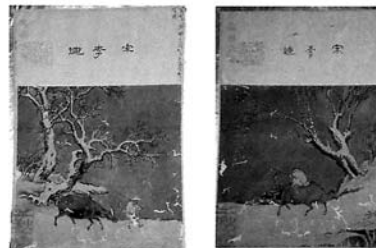


図1 李迪 雪中帰牧図(大和文華館蔵) 図2 黒屋数馬宛井伊掃部頭書簡(図1の付属資料) 図3 帰牧図(模者不詳・千秋文庫蔵)

季刊 美のたより No.164

平成20年10月11日

発行 大和文華館